

27:27 それから、総督の兵士たちはイエスを総督官邸の中に連れて行き、イエスの周りに全部隊を集めた。

27:28 そしてイエスが着ていた物を脱がせて、緋色のマントを着せた。

27:29 それから彼らは茨で冠を編んでイエスの頭に置き、右手に葦の棒を持たせた。そしてイエスの前にひざまずき、「ユダヤ人の王様、万歳」と言って、からかった。

27:30 またイエスに唾をかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたいた。

27:31 こうしてイエスをからかってから、マントを脱がせて元の衣を着せ、十字架につけるために連れ出した。

#### <説教>

総督ピラトは裁判官として、イエス・キリストについて「私はあの人には何の罪も認めない」(ヨハネ 18:38)としたにもかかわらず、人を恐れ、自分の地位と守り身を守るために、「この人の血について私には責任がない。おまえたちで始末するがよい。」(マタイ 27:24)と言って〈バラバを釈放し、イエスはむちで打ってから、十字架につけるために引き渡し〉(26)しました。

この「むち打ち」は死刑が確定した犯罪人に対して、刑の執行の前に行われたものです。

このローマ人のむちは、何本かの葦ひもに鉛などの金属片又は骨の破片がつけられていたもので、皮膚を裂き、肉にまで食い込んで非常な苦痛を与えるものでした。

ピラトがそうやって不正な裁判を行い、責任逃れをして裁判の席を離れてしまった後のことです。

〈それから、総督の兵士たちはイエスを総督官邸の中に連れて行き、イエスの周りに全部隊を集めた。〉(27:27)のです。

〈総督の兵士たち〉とはイエスに対する十字架刑の執行を命じられた人たちでした。

彼らはただ粛々と職務を行うだけのはずでしたが、わざわざ数百人もの〈全部隊を集め〉てイエスを取り囲み、囚人イエスへの嘲り侮辱、虐待を始めたのです。

「むちで懲らしめたいうえで釈放する」(ルカ 23:22)というのがピラトの当初の考でしたので、この〈総督の兵士たち〉が行ったことはピラトの命令ではなかく、彼らが好き勝手にやったリンチ(法によらない私的制裁)と見てよいでしょう。

しかし彼らが〈総督の兵士たち〉であり、行われた場所が〈総督官邸の中〉だった以上、おそらく「見て見ぬふりをした」〈総督〉の責任も問われるに違いありません。

〈総督の兵士たち〉はまず〈イエスが着ていた物を脱がせて、緋色のマントを着せた。〉(28)とありますが、「むち打ち」で既に酷く傷つけられていたイエスには、そのようにされるだけでも大変なことでした。

〈緋色のマント〉はそのとき〈総督の兵士たち〉の誰かが着ていた赤色の〈マント〉のことで、それをもって〈王様〉(29)が着る紫色の衣に見立てたのでした(マルコやヨハネの福音書では「紫(色)の衣」となっています)。

〈それから彼らは茨で冠を編んでイエスの頭に置き、右手に葦の棒を持たせた。そしてイエスの前にひざまずき、「ユダヤ人の王様、万歳」と言って、からかった。〉(29)

〈茨で〉〈編んで〉作られた〈冠〉は王冠ということになります。

〈葦の棒〉はやはり王が権威のしるしとして持っていた杖のような物です。

このようにして、兵士たちは有り合わせの材料でイエスを適当に王の姿に仕立て上げ、〈イエスの前にひざまずき、「ユダヤ人の王様、万歳」と言って、からかった。〉のです。

このとき、兵士たちがイエスを〈ユダヤ人の王様〉だと本当に認め信じていたのではないことは言うまでもありません。

それどころか、〈からかった（嘲った）〉と書かれているとおり、彼らが〈ひざまずき、「ユダヤ人の王様、万歳」と言〉った姿（形式）は、普段彼らが「カエサル、万歳」と言ってローマ皇帝を崇拜（礼拝）していた姿のパロディー、おふざけと言うべきものでした。

それは、この「ユダヤ人の王様」だと自称しているとのことでユダヤ人から訴えられているところの、見るからに惨めで哀れな人間イエスをもっと更に肉体的にも精神的にも痛めつけ、いじめて楽しもうという極めて冷酷な態度とも言えるでしょう。

また、そんな自称「ユダヤ人の王様」のことで総督に訴えて大騒ぎしているユダヤ人を嘲ってやろうという思いもあったかもしれません。

また、こんな「ユダヤ人の王様」などというわけのわからないやつのおかげで自分たちは今、やらなくてもよかった余計な仕事（本当ならあの二人の強盗の分だけで済んだ十字架刑のための諸々の準備とその執行）をやらされている、というような不満もあったのかもしれません。

そして彼らは〈イエスに唾をかけ、葦の棒を取り上げて頭をたたいた〉(30)のでした。

その顔に〈唾をかけ〉られ、拳で殴られ、平手で打たれるという侮辱をイエスは既に大祭司の家の中でユダヤ人たちから受けていました(26:67)が、再び同じような辱めをイエスはお受けになられました。

〈葦の棒を取り上げて頭をたたいた〉その頭には茨の冠がそのまま置かれていたに違いありませんから、それもまた残酷なことでした。

〈こうしてイエスをからかってから、マントを脱がせて元の衣を着せ、十字架につけるために連れ出した。〉(31)

この後、十字架につけられた後もイエスは人々から嘲られ、ののしられます(39,41,44)。

「彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった。」(イザヤ 53:3)と言われていたとおりでした。

このようにしてイエス・キリストはユダヤ人からもローマ人からも、つまり全ての人から蔑まれ、尊ばれず、辱めを受けられたのです。

イザヤはあの人がこの人が〈彼〉を蔑み、のけ者にし、尊ばなかったと他人事のように言わず「私たちも」と言って、自分もまた〈彼〉を蔑み、のけ者にし、尊ばなかったと告白したのです。

ならば、今日の私たちもまた自分の思いと言葉と行いのうちにイエス・キリストに屈辱を与える罪の傾きがあることを認めるほかありません。

たとえ礼拝の場に参加していても、もし「本当は今日は他のことをしたかった、他の所に行きたかった。なまじクリスチャンなものだから仕方ないとは言え、迷惑なことだ」みたいなことを考えているとすれば、それは〈ひざまずき、「ユダヤ人の王様、万歳」〉と格好と口でやっけていても実際はイエスを辱め痛めつけていた〈総督の兵士たち〉と何も変

わりません。

戦前・戦中に神社参拝を拒否した韓国の教会やクリスチャンを、「あいつらのおかげで自分たちも同類だとお国や世間から変な目で見られ疑われては迷惑だ」と言って無関係を装い切り捨てた日本の教会やクリスチャン（彼らも形のうえでは礼拝を守っていました）も実質は同じでした。

そんなふうに「福音を恥とする」ことでイエス・キリストを辱めるような、いわば体質とも言うべき大いなる傾向が私たちの中に今なおあることを認めましょう。

ならば、そんな私たちの深く拭いがたい罪のために、その罪を身に負われ、私たちがその罪を離れ、イエスのために生きるために、あらゆる辱めを耐え忍んで十字架で死なれ復活されたイエス・キリストのもとに立ち帰り続け、留まり続けるほかありません。